

水史談会報

2018(平成30)年
11月発行 水史談会
第33号

【研究ノート】

垂水市出身の著名な俳人・肝付素方

町田 洋一

我が垂水市に俳句で有名な俳人が居たことを知っていますか。その方の氏名は肝付素方(キモツキ ソホウ)さんで、本名は肝付了介(キモツキ リョウスケ)と言う方です。素方さんは本市敷根町集落の出身で、現在息子さんの肝付坦(キモツキ ヒトシ)さんが、自営のマンション「イターニティ栄光」にご夫婦でお住まいになっています。

さて、本題の素方さんは一八九五年(明治二十八年)に現在の場所(敷根町集落)で生まれました。鹿児島師範学校、中央大学

〔現代鹿児島俳句体系1〕ジャブラン より



夜間専門部商科を卒業後、一九二二年(大正十一年)に「日清紡績」に入社しましたが、疎開で帰郷し一九四五(昭和二十)年ごろ「垂水汽船株式会社」(現在の南海郵船)に勤務、支配人をされていました。

俳句は一九二一(大正十)年に吉岡禅寺洞(ヨシオカ センジドウ)主宰の俳誌「天の川」に所属して句作を始め、有名な俳人・高浜虚子(タカハマ キョウシ)主宰の「ホトトギス」に作品が初入選しました。一九四六(昭和二十一年)年に西村数(ニシムラ カズ)氏らと俳誌「郁子」(ムギ)を創刊、一九五三(昭和二十八)年に野見山朱鳥(ノミヤマ アスカ)主宰の「菜殻火(チガラビ)」の同人となり、一九五五(昭和三十)年には「ホトトギス」の同人に推挙されました。

一九五九(昭和三十四)年十一月に句集『噴煙』を発売、多くの作品を発表されました。また、郷土俳誌の創刊や育成、ラジオ俳壇の選者など後進の指導に尽力されました。その功績が認められて一九六二年(昭和三十七年)に本県俳人として初めて「南日本文化賞」を受賞されました。

俳誌「菜殻火」の主宰・野見山飛鳥氏は、素方の句を次のように評しています。

「桜島のある風光や船会社の生活を通して詠い続けてきた郷土諷詠詩であり、長い俳句修行を経て感情は沈潜し、厳しさを蔵した平明な表現は、さながら悠々として立つ大樹の相を示している」(句集『噴煙』の序より)

また俳誌「天日」(テンジツ)の主宰・上迫和海(ウエサコ カズミ)氏は

次のように紹介しています。

「素方の俳句を集めた句集『噴煙』には、四十年に及ぶ作品が多くあるが、次の二句を選んでみる。

(二句目)

島津勢我が祖倒せし野に遊ぶ

大隅半島の支配者であった肝付氏が、島津の軍門に下ったのは一五七四(天正二)年のことである。それから四百年の時が過ぎ去った今、敗れた側の子孫である自分が敗れ去ったこの野に、なごやかな春の日を浴びながら遊んでいる、という句意である。何か大きなものが詠われている感のある句である。

※師範学校時代の先輩である沼口香霧氏は、この句に対して次の句を贈っています。

島津家の男女は美男美女が多いのであるが、領主の末裔である了介さんは美少年であった。

領主の裔美男に老いて冬浪碑 香霧

(上迫和海氏選の二句目)

灸すえて百姓盆に遊び居り

作句の年までははっきりしないのだが、昭和のごく初期の作品である。それこそ盆と正月だけの庶民の休みだった頃であろう。お灸をすえあうことが、農民の「遊び」であるという描写に、その時代の農村生活に漂う雰囲気が色濃く伝わる。」

素方さんは一九八二(昭和五十七)年一月十三日の急性心不全により亡くなりましたが、県下の俳句愛好者の間でこの優れた俳人を後世に伝えようと句碑建設の機運が高まりました。その中心として活動されたのは「郁子」の主宰・西村数氏でした。

当初句碑建立の場所は「国民年金保養センター」(現アザレア)と決め、碑面の句は

冬浪の音も勤めとともに馴れ

となりました。(この句碑は後に垂水市文化会館の敷地内に移設されました)垂水汽船株式会社に勤務されていた頃の、いわゆる働く者の俳句であり、代表作でもあったので取り上げられたようです。



(垂水市文化会館敷地内)

「肝付素方句碑建設委員会」が、約四十人の発起人で立ち上げられました。趣意書を作り募金活動が始まり目標金額三十万円、一口五百円と決めて活動が始まったのは一九七二(昭和四十七)

年十月のことでした。

募金は目標金額の二倍の約六十万円も集まり、同年十二月十日（日）に「句碑除幕式」が国民年金保養センター「垂水温泉ホテル」の句碑前に於いて、素方さんご夫妻をはじめご家族を中心に約百二十名の参列者があり盛大に行われました。除幕式終了後、ホテルの大広間において祝賀会が開かれ、同時に「句碑除幕記念俳句大会」も行われて、素方さんの選句により多くの入選句が発表されました。

ここで、素方さんの句集『噴煙』の中から一部を紹介しましょう。

病む妻に夜長の机よせにけり

荒れてゐる海へ枝を出し梅咲きぬ

麦秋の財布何処かに置き忘れ

客の居て閉づる銀行花水

坦さんご夫婦がお元気なころ、自宅にお住まいの時訪問して色々な話を聞きました。部屋には有名な「ホトトギス」の主幸・高浜虚子氏が素方さんに贈られた『素方居』（ソホウキヨ）という扁額が飾ってありました。

垂水出身で、句碑まで建立された優れた俳人がおられたことを知って頂きたいと思えます。

市太郎墓碑銘

— 垂水新御堂、龍福院址 — ②



【転写・ルビ】

(背面)

そのまが

其詳なる人皆志れる所な免里余与楚那可良聞に忍ひ春徒あ

尔拙支詞毛て 稚 耆能父の為耳身越捨てたる事乃き満片者し書の

遍しに王か公見楚なし給ひ下を情連む御心乃餘里尔 忝くも詩を作

りて是を以多満せ賜ふ其比或は和哥を詠し或ハ詩を作る能輩いと少

な可ら須是をのつ可ら童子孝道の至誠人乃心を感動せしむる尔あらず

や余是越集めて一卷を那しなつ介て孝感餘編と云府城の教授市來先

生を初め誰可連の序跋の文なと数々有

【注】

孝感餘編・市太郎のことを詠った詩文を伊集院兼愷がまとめた詩歌集。

市來先生・本藩造士館教授、市來政正。序跋の文・序文（まえがき）と跋文（あとがき）

【口語訳】

事故の詳細にわたる事からは、人々がみな知っている所であるようだ。私（伊集院兼愷）は、陰ながらも（その話を）聞くに忍び難く、とうとう拙ない詞であるが、稚い者（市太郎）が、父の言い付けに従って命を捨ててしまった事の有様の一端だけでもと思ひ、書き述べてみたのであった。ところが、わが（垂水領主の島津貴典）公が（私の詩歌を）ご覧になり、貴典公も下々の者たちへの同情の御心のみならず、恐れ多くも漢詩を作られ、市太郎の死をお悼みになったのであった。その当時、（市太郎の死亡した事がらについて）あるいは和歌を詠み、あるいは漢詩を作る人々が極めて多かったのである。（この市太郎の出来事は）もともと童子孝道の至誠の現れた出来事であることから、人々の心を感動させたのではないだろうか。私（兼愷）は、これらの詩歌を集めて一冊の書とし、孝感餘編という書名とした。この書には鹿児島（藩校・造士館）教授、市來（政正）先生を初め、誰や彼やの序文、跋文などが数々備わっている。

（転写・口語訳等・鹿児島史料講読会・上園正人、瀬角龍平）

—（以下次号）—

【お知らせ】

毎月第四水曜日午後六時から、垂水立図書館で定例の郷土史の勉強会を行っています。

『垂水市史』の読み合わせを基本としますが、資料を持ち寄って討論したり、史跡めぐりなど、現地研修を行うこともあります。垂水史談会会員以外の方の参加も歓迎いたします。

— たるみず春秋 —

小春日の光を集め郵便夫

久米芳仙

「冬山やどこまで登る郵便夫―渡辺水巴」という句が念頭に浮かぶが、これは町なかの郵便夫だ。

しばらくぶりに厳しい寒さが途切れた小春日である。路地わきにバイクを停めて郵便局の配達員が門に入っていくのである。きびきびとした配達の様子には小春日和の中でまるでひかりを集めていくようだ。

手紙やハガキの郵便物は人と人をつなぎ、結び付けているのだ。小春日和に届く手紙やはがきにはきっと楽しい、うれしい便りばかりが詰まっているような気がしてくる。

（文・瀬角龍平）